



赴任当時の設備。この写真に写っているのが全てでした。

## アフガン復興は 平和な農村生活を取り戻すことが第一。 それぞれの社会に即した 国家再建が必要です。

パキスタンやアフガニスタンでの医療活動や、干ばつ対策のための水源確保など幅広い活動を行なうベシヤワール会。その代表である中村哲さんは九州大学医学部の出身です。2003年、アジアのノーベル賞と言われるラモン・マグサイサイ賞の平和・国際理解部門を受賞した中村さんに、活動の展望と九州大学に寄せる想いをうかがいました。



アフガニスタン内部診療所開設のための調査のため山越えをする中村医師とスタッフ

**吾郷**..この度はマグサイサイ賞の受賞おめでとございます。まず、ベシヤワール会の代表として、活動を始められたきっかけを教えてくださいませんか。  
**中村**..私は山が好きで、一九七八年に福岡からのカシミール遠征隊に医者として同行しました。行ってみると非常に親しみやすい場所でした。そのうちに日本キリスト教海外医療協力会（JOCIS）がベシヤワールで働く医者を探しているというので、このまま日本で病院勤めをして終わるのは耐えられないという気持ちもあり、現地へ赴きました。  
**吾郷**..活動には紆余曲折があったと思いますが、実際にどのような問題点がありましたか。  
**中村**..問題は今も続いています。どうやって現地のニーズに応えるか、外国人としてどう役に立てるか、ということですね。私は内科医ですが、現地には職を探している内科医や外科医がいっぱいいます。また、お金さえ出せば最高水準でなくともそこそこの診療は受けられるんです。それなら現地の人ではできないことをやろうと、ハンセン病の医療活動を始めました。皆がやることは誰でもできます。それより本当にニーズがありながら、誰もやらない仕事をする活動を基本にしています。現在はハンセン病の医療活動に加え、無医地区の診療、清潔な飲料水や灌漑水の確保など水の問題にも取り組んでいます。



ヌーリスタンの村人と中村医師

**吾郷**..本来、無医地区、灌漑水の確保などは国家レベルの問題。個人レベルで取り組むことではないとも思います。それがアフガニスタンでは、イラクでの新たな戦争が起こってから国際的にも関心が移ってしまっただけに思えますね。  
**中村**..それは大事なポイントです。国際援助は脚光を浴びると「我も我も」とやってくるんですが、別の出来事が起こるとすぐに去ってしまいます。ですからアフガニスタンの国際社会への不信任は根強いですね。また国家再建が外国人主導で行われているのも問題だと思います。明日の食料をどうするか悩んでいる国に、鉛筆を配っても意味がありません。文化をどう言う前に、まずちゃんと食べられるようにする必要があります。  
**吾郷**..身につまされる話です。私は九州大学の前にILO（国際労働機関）にいたのですが、どうしても供給側の企画になってしまっただけですね。本当に現場を見てやっているのか大きな疑問がありました。

### ベシヤワール会について

NAKAMURA Tetsu  
**中村 哲**

ベシヤワール会現地代表、PMS（ベシヤワール会医療サービス）総院長  
1945年、福岡市生まれ。73年、九州大学医学部卒業。84年に日本キリスト教海外医療協力会からの派遣でパキスタン・ベシヤワールに赴任。現在はアフガン難民のための医療活動など、さまざまな支援活動に取り組んでいる。「ベシヤワールにて」ほか著書多数。

聞き手/吾郷 眞一 AGO Shin-ichi  
法学研究院国際関係法学部門 教授 (写真左)





伝統的な用水路



外国団体が補修したコンクリート工事の用水路。コンクリート補修部分は毎年壊れていますが、地元の人では治せなくなっています。左写真の様に土盛り、植林を行えば、地元住民が自分達で管理できます。



完成直前の灌漑用井戸に降りる中村医師



クナール河からの用水路工事。半砂漠化した耕作地に水量の豊富なクナール河から約16kmの用水路をひき、約1500ヘクタールを灌漑する予定。



ジャララバード近郊での食糧配給（食糧配給は2002年3月終了）



現代は学問の意味が問われている時代。  
九州大学には本当の学問を  
追究する大学であってほしいと思います。

中村：考え方そのものはあまり変わって  
九州大学にいた当時からあったのです  
か？

### 九州大学時代の思い出

吾郷：社会の役に立とうというお考えは  
九州大学にいた当時からあったのです  
か？

中村：アフガニスタンでは経済観そのもの  
がちがいます。近代的な経済や産業を  
受け入れるようにできていません。もと  
もと農業国であり、農業復興が国家再建  
の要なのです。まず平和な農村生活を取  
り戻すこと。国民が安心してご飯が食べ  
られる、家族が安心して一緒にいられる  
社会をつくるべきです。

吾郷：WFP（国際連合世界食糧計画）  
ではアフガニスタンに食料援助を行なっ  
ていますが、どう思われますか？

中村：これも両刃の剣です。ほとんどの  
村は自給自足社会で、極端に言えば隣の  
村が滅亡しても自分の村は生き延びるこ  
とができます。ところが食料の配給を続  
けていると、自給自足の原則が崩れ、食  
料価格の下落を起したりします。私た  
ちは食料の配給は緊急援助に限ると考え  
ています。

吾郷：WFPには食料供給の代わりに井  
戸の掘削作業などの仕事をする「フリー  
ド・フォー・ワーク」というプロジェク  
トがありますが。

中村：それは失業対策事業としてもいい  
方法ですね。ただし末端の現場まで目を  
光らせていないと、必要のない場所に井  
戸を掘るなど、本場に役立つことをして  
いるか分からないことがあります。重要  
なことは「現地のニーズ」、現地の立場  
に立って考えるということだと思います。

吾郷：人間の本来の目的をふまえて勉  
学に励むということですね。私も努力  
したいと思います。本日はどうもありが  
とうございました。

吾郷：私も著作を読ませていただきまし  
たが、中村さんは文筆家としても一流だ  
と思います。最後に九州大学や後輩たち  
に何かメッセージをいただけますか？

中村：私たちの持っていた価値観が大き  
く変わろうとしています。本来デモクラ  
シーは人を大切にするために生まれたは  
ずなのに、今はそれが戦争につながって  
いる。そうした危機的状況の中で、人と  
してどう生きるかが問われている時代で  
す。そのような時代だからこそ、将来を  
しっかりと見据えて、純粋な学問を追究し  
ていくことが非常に大切だと思います。

本日の学問を極めていくことができる大  
学はそうありませんが、九州大学ならで  
きます。社会的責任を考えながら、九州  
大学と学生の方々には頑張ってもらいま  
す。

吾郷：私も著作を読ませていただきまし  
たが、中村さんは文筆家としても一流だ  
と思います。最後に九州大学や後輩たち  
に何かメッセージをいただけますか？

中村：私たちの持っていた価値観が大き  
く変わろうとしています。本来デモクラ  
シーは人を大切にするために生まれたは  
ずなのに、今はそれが戦争につながって  
いる。そうした危機的状況の中で、人と  
してどう生きるかが問われている時代で  
す。そのような時代だからこそ、将来を  
しっかりと見据えて、純粋な学問を追究し  
ていくことが非常に大切だと思います。

本日の学問を極めていくことができる大  
学はそうありませんが、九州大学ならで  
きます。社会的責任を考えながら、九州  
大学と学生の方々には頑張ってもらいま  
す。

### ベシャワール会

中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成された会。中村氏はパキスタン・ベシャワールへ1984年に赴任し、現地で診療活動を開始。ベシャワールは、アフガニスタンと国境を接するパキスタン北西辺境州の州都。1986年からはアフガン難民のためのプロジェクトを立ち上げ、現在アフガニスタンの無医地区山岳部に3つの診療所を設立。1998年には基地病院PMSをベシャワールに建設、パキスタン山岳部に1つの診療所も併せ持つ。2000年からは中央アジアを襲った大干ばつ対策のため、特に被害の大きかったアフガニスタン国内で井戸掘り・カレーズの復旧など水源確保のための事業を实践。「人間が住むことができる環境を回復すること」を目標に、2001年の「アフガニのちの基金」をもとに医療事業、水源確保事業に農業計画を加えた「緑の大地計画」を継続し、長期的な灌漑計画を進行中。現在、ベシャワール会ではパキスタン北西辺境州・アフガニスタンで年間約16万人の診療を行なっている。現地ワーカー約820名、日本人ワーカー約20名（2002年）。また日本には約12000人の会員がおり、ベシャワール会の現地活動を支援している。

